



キリストの香りを届ける“手紙”

II コリント 2・14~17 (要旨)

説教者 原田憲夫

本日の「鍵の語キワード」は「香り」です。「キリストの手紙」である私たちを通して放たれる「芳ばしいキリストの香り」を覚え、心に刻みましょう。

先月初め「ライフ・ライン」の収録(無観客)でご一緒した「ユーオーデー・アンソブル」(珍しい名の由来→II コリント 2・15)。楽器を通して素晴らしい「香り」を放ちます。来月(9月)放送予定。

[1] 「香り」

聖書の時代/世界では、下水道が整備されていませんでした。現代人には想像もできないほどの悪臭が漂っていたといえます。

しかし、この不快な問題は昔だけの話ではありません。高度経済成長の陰の部分と言われる「公害問題」が深刻な事態となったのは50~60年前のこと。それまで澄んでいた川が真っ黒に汚れ、ひどい悪臭等々。やさしさや思いやり、正しさや清さをどこかに忘れてきた時代-社会は、人々の心を蝕み、腐敗し、悪臭を放つ…。

ところが私たち人間は不思議なもので、その悪臭に浸かりきっていると、不快感も嫌悪感も感じなくなるといいます。

けれどもそんな私たちに、本来、私たち人間が持つやさしさや清い心と呼び覚ます「芳ばしい香り」があると使徒パウロは語るのです。それが「キリストを知る知識の香り」(14)です。

[2] 「キリストを知る知識の香り」

使徒パウロはこの「香り」の二面性を語ります。すなわち「福音」に心を閉ざす人々には、「死に至らせる香り」であり、「福音」に心を開く人々には、「いのちに至らせる香り」(16)だと。

実は、パウロが語る「香り」は「十字架のキリスト」から生まれるものです。

ここでいう「香り」は、旧約時代、幕屋や神殿で焚いた「香」-固形の芳香物質(出30・34-38)が放つ「芳ばしい香り」に由来します。

「香を焚く」行為は、神への献げもの-「献身」を意味し、「煙が立ち上る」ことは「祈り」として尊ばれます。

「十字架のキリスト」は、まさに神が私たち

人間を救うために自ら用意された「最高の香り」だったのです。

十字架の上でキリストは、すべての人の悲しみ、病い、重荷、そして罪・汚れのすべてを引き受け、そのいのちをもって私たち人間の一切の罪・咎を贖い、清算してくださいました。

「十字架のキリスト」(香功)から放たれる「香り」は、救いをもたらす香り、いのちに至らせる香りです。ですから、この「キリストの香り」を受け取る人はだれでも救いにあずかり、いやされます。罪と死の苦しみ・束縛から解放されるのです。

▷あなたは今日、「いのちに至る香り」を受け取っていますか？ ぜひ、十字架のキリストが放つ「いのちに至る香り」を、「永遠のいのち」を受け取ってください！

[3] 「私たちは・・・キリストの香り」

使徒パウロはすでに十字架のキリストを信じて歩んでいる者たちに語ります。

「私たちは・・・神に献げられた芳しいキリストの香りなのです」(15)と。

*覚えていますか？ 私たちの教会30年史の題名を→『祈りの香』(黙8・4)

忘れないでください！ 使徒パウロが「神に献げられた芳しいキリストの香り」「ユーオーデー」と呼んだのは・・・私たち-私でありあなたなのです。

→主の約束(14)。

▷では私たちは、あなたは今居る処で、「いのちに至らせる香り」「芳しいキリストの香り」を放っていますか？ このような務めにふさわしい人は、いったいだれでしょうか。

この時代に遣わされた、「キリストの香り」を届ける「キリストの手紙」として大切な使命を果たさせていただけるよう、助け主-ご聖霊に祈りましょう！

*「シャロンの花」を心から歌いましょう！